

---

ふたつのしっぽは長くキラキラと。

あおぶー

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふたつのしつぽは長くキラキラと。

### 【ZPDF】

N1-826X

### 【作者名】

あおふー

### 【あらすじ】

ゼロ魔の一次です。

物語は現代に暮らしていた普通の少女が運悪く死亡し。

神様達のせいで待ちぼうけを。

そのお詫びになんとゼロ魔の世界に生まれ変わると書つか転生を…

さて、誰に転生するのでしょうかね~

ちなみに主人公が転生したキャラは少しだけ年齢が原作と異なりますのでご注意を。

# 1話 バス停で待ちぼうけ。（前書き）

内容改正したの投稿します。

他也順次改正して行きます。

# 1話 バス停で待ちぼうけ。

つわたらな———い！

はあ  
ひめです

あ、初めましてこんにちは。

この駄文一次小説の主人公、葵鈴音と申します。

冬の足音が聴こえて来たこの時期をいかがお過ごしですか？

わたしは毎日バス停横のガードルの上に腰掛けながら毎日歌を歌つております。

あの、そんなイタい子を見る目をしないでくれませんか？

こっちにだつて事情があつてこんな事をしていんんですから。

ん？ おやおや、あちらから歩いて来るのはわたしの友達だった彩花ちゃんじゃありませんか。

その隣を歩いているのはサッカー部の なんて名前でしたでしょうね。

ん～～～ダメです思い出せません。

とりあえずついに彩花ちゃんにも春の季節が到来したみたいですね。

わたしに断りも無くオトコ作るとは 彩花死ね！ ってうそです。

いつまでも一人仲良くしてくださー。

しかし腕を組みながら田の前でイチャイチャとされると、何とかいつもカツと来るものがありますね。

「いつらが一人一緒に写真撮る時にでも写り込んでやりますか？」

きっとわたしの姿を見たらテンションが一気にガクンと下がる事で  
しまう。

お？ 朝の通学バスが来たようですね。

頑張つて勉強して来るのよ~行つてらつしゃ~い、つて  
ぢやいましたか。

あつ、じー、じー、めんなんせこ、つこお友達だつた女のトコ氣を取  
られちやこましー。

あ、そうそう、事情でしたね事情。

えつと、実はここで半年程前に起きた交通事故に巻き込まれてわたしは16年と言つ短い生涯を終え。

今は「うやつて幽靈となつ、あの世からのお迎え」といつのを待つて  
いふのですね。

そのお迎えと並ぶのがどういわけか半年程たつても全然やつて来ないんですよ。

ひまをつぶそうにものこの場所から半径50㍍くらいしか離れる事が出来ませんし。

幽靈なので生きている人間と話す事も触れる事も無理と来まして。

このままでは発狂してしまつと毎日歌を歌つて氣を紛らわせている  
わけなんです。

しかし神様と云つのがいるならばもう少し死者の氣持ちと云つのを  
考えて欲しいものですね。

自分が死んだ場所から離れられないばかりか。

お花とお水の捧げられる回数が日々減つて行くの見てるの相当  
キツイものがあります。

はあ このままだとここ地縛靈にでもなりそうな予感がしてなり  
ません。

迎えに来ないならこちから行つてみましょつか。

でも、わたしここから50㍍くらいしか離れられない ん？

そつ言えば身体を浮かせる事出来るのに空を飛んだ事がありません  
でしたね。

ひまつぶしをかねてやつてみましょつか。

では、やつと決めたら早速、ヒーヒー。

おお～見慣れた場所でも高こうとひから見るに違つものですね～。

あ、あそこにあるのがわたしの家であつちが彩花ちゃんの家で、あ  
れが学校ですね。

今日せうじから夕日でも眺めて仮を紛らわせましょ。

なんか身体が上に上にとひつ張られて行くんですけど。

あれ、ちゅ、ちゅうと、まか星ですか？

このまま空高く舞い上がつてわたしは星にでもなるんですか？

それはそれでいいかも、つて、ふわああああああ～。

じてつ！ いたたた、なんで空で腰を打たなきや

ビーヒー

かこ?

なんか雲みたいなもやもやとした地面の上におつきな建物が立つて  
いるんですけど。

え、じゃ、じゃあ死んだら迎えを待つのじ  
もしさーーがあるの庄? やなくて。

こちらから行かなければならなかつたとか？

は、半年もあるの場所でつらい思いをしながら待つていたわたしつて。  
。

ま、まあ、とりあえず建物の中に入つてみましょうか。

扉が開け放しとは無用心ですね、おじやましますよ。

あ、死者のみなさん受付は一九九〇年壁に書いてありますけど。

その受付に誰もいないと言つたばかりの事なんでしょう？

誰かいませんかー半年程遅れてやつて来た死者がここにいるのですけどー。

どいつやらのフロアには誰もいないよつです。

はあ、そこいら歩き回つていればいずれ誰かに会つてしまつうろしてみますか。

しつかし大きな建物ですね～へタな大型デパートより広いですよこ  
れは。

ん？ 人の声が聞こえた気が あ、また、これは間違いなく人の声です。

「いつの方から聞こえて来てるようだ。

あ、どいつやつあのドアの向いからですね。

「はあ 誰が同会やつてもいいけど羞〇心はどいつなるのよ。

野〇保ファンからするとそつちの方が心配なのよね。」

なにかとても俗っぽい内容の声が聞こえて来たんですけど。

「へへ、現世じや ありませんよね？」

と、とりあえずやつと人に会えそつなのでノックをコンコンヒト。

「失礼しま～す。」

「あ～まだ休憩中よ、報告なら休憩時間が終わってから あんた誰よ？」

ドアを開けてみると、居たのは高級そうな杖に週刊誌を広げて妙齢の女性でした。

髪の毛の色と瞳の色からすると外人さんですね。

「えつと、半年程前に死んだ死者の葵鈴音と言つものです。」

「はあ？ 今なんて言つた？ 半年前の死者つて言つた？」

なんかすごい驚いているんですけど 。

「そ、そりですけど。」

「あんた迎えから逃げ回ってたんじゃないでしょ！」

「そ、そんな事してません。」

「じゃあ、なんで死んでから半年もかかってやつて来たのよ？  
いや、いい、あんたがよつと机の前に立て！」

「はあ、じつですか。」

「今からあんたの頭の中を覗くからそのまま動かないで、いいわね。」

「

頭の中を覗くって、い、いつの間にそんな大きい杖を手にしたんですか？

ちよ、ちよつと、おそれて頭を叩く気、じゃ！

「いたつ！」

「いら動くな！ ええと、なにに あ、あいつらあああ！」

「ナメくせつた事をしおつてからに！」

えらい怒ってるんですけどこの人。

「はあああ もういいわよ。」

「は、はあ。」

「 悪かったわね、一応あいつらの上司として謝つておくわ。」

「は？」

「あいつらにはしっかりと制裁を加えておくから。」

「あ、あの話がよくわからないんですけど。」

「あ？ ああ、身内の恥を晒すようであんまり言いたくないのだけ  
ど。」

あんた被害者だから特別に教えてあげるわ。

あんたはね、魂回収班の奴らがサボったせいでここに来るのが半年  
も遅れたのよ。」

「ひ、ひどい！」

「悪かったわ、自分が死んだ場所に括りつけられたまま半年もほつ  
たらかしこしきやつて。」

その間に相当辛い思いしてたみたいだし。

生まれ変わることでここに天界に住むにしてもそれなりの優遇はさ  
せてもらひわ。」

「生まれ変わりに天界に住むですか？」

「そう、あんた善人って言うか無害の部類に入る人間だからここに住む資格あるわよ。」

む、無害ですか 微妙な位置にいるんですね。

「は、はあ、あのその前にお姉さんはいつたい誰なんですか？」

「あたし？ あたしは神よ。」

「 。」

「なによその信用出来ないって顔は？」

「え、いや、そんな事はないです！」

「証拠見せてやりましょうか証拠を。」

「証拠ですか？」

「そう、葵鈴音、性別女 享年16歳。

死因は大型トラックの群れに轢かれてつて悲惨ね～。

性格はやや内向的で家族構成は父親母親と四歳離れた兄との四人暮らし。

身長は152センチに39キロって痩せ過ぎは身体に悪いわよ。

スリーサイズはB77/W54/H76つて、ふつ。

悩みは成長期なのに1年前と胸のサイズがぜんぜんわからましたー！

い、いいいきなし、ななななにを暴露しやがりますか」「ん」「や  
うわ！」

それも、  
ふつ！  
つて笑いやがりましたね！

「ほれ、これが頂きと言つものだ。」

ううううーー！ 田に入らなによつていたのをいれみよがしひ  
むかむかとおおおーー！ もう許さん！

「悪魔はどうだーー！」だーー！ こんななら丑いーー！

「コイツをぶちのめす力をくれるなら魂でもなんでもくれてやるから。」

セハセト出でまやがれええー！

「うふ、うふとなにを物騒な事を呟んでこむのよ。」

「やかましこー、おまえに持たれの者の想みと世のものを思って知らせてやるー。」

サターンー、ルシファーー、この際ハホの王でもいこからわいかと出てこー、もがもが。

「わ、それ以上呟んじゃダメー、あいつらおもしろ半分でマジで来るうだからー！」

「むーー、むーー。」

「悪かつたわー、悪かつたからー。」

「むむーむーー、むむむーむーー。」

「あ、あんたの望む願望を実現出来る機会をあげるからそれで手を打ちましょー、ねつー、ねつー。」

「むー。」

「じつ? 取引成立でいいわね?」

「むー。」

首を上に立てて立つ。

「なら手を離すから物騒な」とを口にしきりやだめよ。」

「 約束破つたらどうなるかわかつてゐるでしょうね、神様。」

「 わかつてゐるわよ、まったく神が人間に齎されるなんて悪夢だわ。」

「

「人の触れではいけないところに触れたからです。」

「はあ～まあ、確かにあたしも悪のりし過ぎたわ。」

それでどうするの?」

「 死んでからも歳を、あ、いや、身体は成長するんでしょう  
か?」

「それはないわ。」

「 そうですか 。」

と、なるとこの大きさのままと なら次の人生こそ持てる側の人間にー

「生まれ変わりでお願いします。」

「わかったわ、じゃあこれ書いて。」

「またどひから紙ヒペンを取り出し まあ、神様だからなんでもあります  
なんじょつ。」

「えつヒ、これは？」

「願望アンケートよ、それ見てからあなたの送り先ヒ器を決めるか  
い。」

「あ、なるほど、ではでは眞面目に書かなければ。

「わかりまし、それじゃ書きます。」

えつヒ、？番、お金はあった方が、まあ、あったに越したことはないですか。

？番、地位は高い方がいいか、それなりでいいです。

？番、髪色は、今が黒だから別なのがいいですね、とつあんず変な  
色でなければ、ヒ。

ふう、このアンケート結構細かいですね。

えっと次は  
。

「終わりました。」

「どれどれ ふんふん、なるほど  
やないんだからー。」

「な、なんですか！ ちょっといろいろ夢を見たっていいじゃないですか！」

「だからって、理想男性像は女の子に暴力振るわない、優しくしてくれる。

例えば剣一本でも命を懸けて護ってくれる、でも普段は可愛らしい系の人って。」

「あーもーー だめなら書き直しますから返してくださいー。」

「いいわ、いいわ、じゃあ、これでいいのね？」

「むー、そうですけど何かー。」

「なんにも一安心、今回は」ひが迷惑かけて辛い思ふれてるからこれに色を付けておくわね。」

「色?」

「また簡単に死にたくないでしょ。」

「そ、それはまあ。」

「だから生きる為の力と言ひのを強化しとくか。」

「あ、ありがとうございます。」

「それじゃいくわよ。」

「我の名はロキ、我命ある、この者が望む世界へのゲートを開け!」

おおー目の前に大きな鏡が!

ん? 口キ? それって確か悪戯をする神様だったような。

「そしてその者が望む新たな世界へと導け!」

えあちよ、ちよつと身体が鏡の中に引っ張られて。

「よし、久しぶりにまともな神術を使つたけど上手く行つた

わ。  
」

ひ、久しぶりにまともな神術つて。

「それじゃ新しい世界で頑張るのよ～ちゃんと繋がっているはずだからたぶん。」

い、今たぶんつて言いましたよね！ 絶対言いましたよね！

「じゃあね。」

ちよ、ちよつと背中を押さないでください！

「ほら、理想の王子がいるかも知れない世界にはよ行け。」

いたつ！ 背中を蹴らないでつて、吸い込まれる！ いやあああああああああああああ。

2話 辞書をひけ（前書き）

改正しました。

無害な生物なはずなのに死んでからも酷に丑にあつなんて。

前世のわたしは余程運が無かつたのでしょうか。

それにしても「ほんとう」なのでしょう?

真っ暗だけどとも温かくてドクン、ドクンっと音が聴こえて来ます。

なんでしよう、まるでお母さんの胸に抱かれているみたいで眠くなつて来てしました。

お母さんか。

わたしの遺体を見てから体調を崩してずっと寝込んでいた。

バス停にいた時に友達たちが話していたけど大丈夫かな。

お母さん お母さんに忘れられるのは悲しいけれど。

わたしの事を忘れて樂になれるなら忘れていいんだからね  
。

あれ 、急にどうしたのでしょうか?

身体が圧迫されて、く、苦しい。

狭い、狭いよ、苦しいよ。

声? 人の声? 苦しんでる声?

ひ、寒い、寒いよ。

うつ 、息が出来ない。

し、死ぬ 、死んじやう、誰か助けて。

嫌 、また死にたく無い。

まだ何もしていしないのに死にたく無い。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、いやだいやだいやだいやだいやあああ  
あああ！

「おわわわーおわわわーおわわわー」

「産まれた！ 産まれたましたわ！ 元気な女の子の赤ちゃんが産  
まれましたわ！ 奥様！」

「そう、良かった。

早くあの人を呼んで来てちょうだい。

私達の可愛い赤ちゃんに早く名前を付けてあげたいの。

「はい、今すぐこちら呼びいたしてまいります！」

この日、わたしは新しい世界で生を受けました。

そして私の新しい名前。

この世界での私の名前は。

ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルテンホルフ。

どこかで聞いた事がある名前なのが少し不安な生後間もない私でした。

この日から数年後。

みなさま、こんばんは。

葵鈴音ことベアトリスです。

わたくしがこの世界に産まれてから早くも三年が過ぎてしましました。

みなさまはお変わりありませんか？

わたくしはうですねえ。

『おほほほ。』

とか。

『嫌ですわ奥さまつたら。』

とか。

『わたくしの書いとが聞けぬと書いのですかあなたー。』

とか、どこの中世貴族様ですか言葉が四六時中耳に入つて来て口調がおかしくなつて来ました。

いえ、おかしくと書いつよつ書き換えられてると書いのが正しいのか  
も知れません。

なんでも産まれてから7歳くらいまでが言語を一番覚える期間だそ  
うですから。

今も、ものすごく勢いでわたくしの頭の中は書き換えられてるの  
かも。

そ そつ考へると、ちよ ちよつと怖いものがありますね 。

ま、まあ、そこの余り考へなつとして 。

えっと、わたくしの名前で既に賢明なみなさま方はお察しかと思われますが。

あえて言つます、あの悪戯神様やつてくれました。

わたくしはなんどゼロの使い魔の世界に転生してしまったのです。

またあの神様にお会いする機会がありましたら。

あ・な・た・は生まれ変わりと転生の意味もわからないのですかダメダメ神め！

と、田の前に正座させて小一時間程お説教をしてやりたいです。

はあ、確かに兄の部屋で何気なくゼロ魔を読んでいた時に。

ルイズさんみたくお姫様だっこをされてみたいとか。

好きな女の子の為に1対7万つて才人カツコイイとか思つて。

生まれ変わるとしたらこんな世界がいいなあ。

と、思つた事があるよつた気がしますけど。

それはわたくしが今よりもっと小娘だった時の話です。

それなのに、それなのに、あの悪戯神様め！

だいたいベアトリスって持たざる者の全ての敵ティファニアさんを

ベアトリス、グッジョブです。

それにしてもこんな事になるなら机の口魔をよく読んでおけばよかったです。

そうだ、記憶が薄れない内にメモっておきましょう。

あやふやな知識でも役に立つかも知れませんからね。

文字は見られても大丈夫なよつて日本語でカキカキと。

えへと、確かにこの大陸の名前はハルケギニアで。

実際のヨーロッパ大陸をモデルにしているんでしたよね。

で、大きな国はトリステイン、ガリア、アルビオン、ロマリア、ゲルマニア？

それで、確かアルビオンでクーデターが起きてウェールズさんが死んでから。

神聖とか新生とかアルビオンがトリステインに攻めて来て撃退され。今度はトリステインとゲルマニアの連合軍がアルビオンを攻める、でしたっけ？

それからなんか色々とあってティファニアさんを才人さん達が魔法学院に連れて來たんでしたよね。

そこでわたくしことベアトリスが、おーほっほっほっ、みたいなノリでティファニアさんをイジメたり。

わたくしが逆に泣かされて仲直りをした、でしたっけ？

うへん、いまいちと言つか全然自信がありません。

こんなのが書いても役に立ちますかね？

まあ、とりあえず魔法学院に留学するまでは特になにも無いでしょ  
うから。

それまでは平和を満喫しつつ不測な事態で簡単に死なないようにな  
って。

難しくても当然いやですけど、備えて。

万が一の時はルイズさんや才人さん達に助けてもらっちゃいましょ  
う。

他力本願つて思われるかも知れませんけど。

わたくしみたいなイレギュラーなのが活躍したらみなさんも面白く  
ないでしょ。

それにわたくしまたあなた思ふやうな事あります。」

「姫さま、姫さまはひがひがひしあわせですか？」

「あ、いめんなやうわたくしを呼んでるみたいなので。

「なに用ですか？」

「あ、姫さま、公爵さまがお呼びになつておられます。」

「わかつました、すぐに行へとお送りしてくだせ。」

「かしきまつました。」

「あい、お母さまのところに行かなくては。」

ん？ な、なんですか、みなさまのわたくしを見るやうな事は？

「あ、二歳時、いっしょに、と？」

そ、それは自分でもよくわかつておつます。

でもでゅよ、愛情をこつぱい注いでくれる両親が。

『早くお前の可愛い声を聞かせておくれ。』

とか。

『ベアトリス、お前の名前をまだよ、早くお母をまつてわたくしを呼ぶのですよ。』

とか、毎日毎日言われ続けたら諦めて、じやあつませんでした。

期待に応えてしまいたくなりませんか？

ええ、そりです、わたくしはその期待に応えてしまつてペラペラとよべ喋り。

調子に乗つてもうと喜ばせてあげよつと読み書きをまどしてしまつたんです。

おのむかげで不相応にも神童とか呼ばれるまでになつてしまつて。

はあ 今さら年相応に。

「ねじりこよめ、おかあしゃま、こいつがおじさんだよ。」

とか言つても無駄でしょうね。

いや、無駄ばかりか、私になにか起きたのでは無いかとあのお父さまの事です。

クルデンホルフ中の水のメイジを集めて私を治療させようとするや  
も知れませんし。

お母さまは、わたくしの育て方が、と歎き悲しまれるやも知れませ  
ん。

はあ自分で自分の首を絞めてわたくしはなにをやつていのうね。

あ、そろそろお母さまのところに行かなくてはなりませんので。

やれやせおはやめ、やせよ。

3話 空を飛びました。（前書き）

改正いたしました。

想像力が豊かな方は見ない方がよいかと一応警告をしておきます。

ちなみに一部史実でござります。

うう プルプルこわい 。

3話 空を飛びました。

みんなも、『わざわざ』。

今日も空に浮かぶ双月がとても綺麗です。

もう見慣れてしまいましたけど月が一つもあると他ののは不思議な感じがいたしますね。

えらいかのね月様にウカギをさせおつまむのやこむつか?

なんでもありみたいな世界ですからこいつもおかしく無い気がしてならないです。

まあ、それはよことして。

わたくしはビアトリスは晴れて6歳になりました。

成長早過ぎですか?

でも3歳~6歳までの間の事を聞いても面白く無いですよ。

それでも構わまないと嘆ひのなうござお話をいたしますナビ。

そりですか構わないですか。

コホン、それではお話をせつていただきます。

以前、周囲から神童と呼ばれるようになつてしまつた、と。

お話をしたのを覚えておられますか？

案の定、自分の首をキリキリと絞める結果になつてしまつて。

両親が専属の家庭教師の数をこれでもかと嘆ひながら増やしてしまつたのです。

みなさまは朝から番まで勉強漬けの日々を想像出来ますか？

夜眠ついても文字や数字が追いかけて来るのですよ。

そして若干6歳にして體のあたりがシクシクと痛むのです。

いつたいこれはなんて幼児虐待なのでしょう。

はあ 今度侍女さんにお願いして良い體薬を探して来てもらいま  
す。

あ、そうそう。

この世界に産まれて良かつたとしみじみと思えた事が先日ありました。

それは、ものは試しことやつてみたらなんとあつさつと杖との契約  
を交わす事が出来て。

もしかして魔法も使えるとか？ と見よが見真似で。

『光よ光よ光よ… ライテーーー。』

と、體えてみたらピカーンと光が出たではありませんか！

あの時の感動と書つたらそれはもう　ふふ、ふふふふ　あ、いけない涎が。

コホン、えつと、みなさまも機会がございましたら是非とも魔法を使つてみてくださいね。

一度やつたらもう病み付きになる事間違いなしですよ。

あ、そうやつ、魔法と言えばあの悪戯神様、最低限の仕事はだけはしっかりとやつていたみたいですね。

わたくしが魔法を使えると書つのを知つたお父さまが魔法の家庭教師の先生を付けてくれまして。

その先生がある日、人の事を変な物を見るような日です。

『　この子は異常だ！　常識では考えられない速度で上達してこむー』

と、書こ出したのです。

どうやら悪戯神様が書つていた生きる為の力の強化と書つのは魔法

の事だつたみたいですね。

ちなみにその後その家庭教師の先生はお父様にどこかに連れられて行つてしまい。

次の日には別な家庭教師の先生がやつてきました。

まあ、自分の常識が世の中の常識と思われているような先生でしたから別にいいんですけどね。

ちなみに今日はこれから浮遊魔法を習いますので。

近い内に空を飛べるもの夢ではありますね。

その時は魔法使いらしく筆に乗つて飛ぶ あはあ～リアル魔女  
つ娘ではないですか。

想像しただけでまたもや涎が出て、ゴシゴシと。

えつと、どこまで話しましたでしょうか？

あ、そうですそうです。

それでは、毎日勉強漬けの生活を送ってる訳ですよ。

しかも近々また一流の淑女になる為の家庭教師の先生が来るとか。

はあ 仕方ない事とは言え正直言つと面倒でなりません。

わがままかも知れませんけど大公国の中とか大貴族の家とかには産まれるものではありませんね。

もつとのんびりとした家風の平凡な貴族の家がよかったです。

あ、そうそう。

子供は大人より自由に見えて実は色々な物に縛られているものですよ。

世の大人のみなさま。

もう少し子供に自由な時間を『えてあげてくださいね。

いち転生者からのお願いでした。

「姫さま、姫さまー。」

あ、いけないそろそろ魔法のお勉強の時間です。

それではみな様方ごきげんよう。

数日後。

「ベアトリスよ、もうすぐ水メイジが来るからそれまでの辛抱だぞ。

」

「怪我は頭にたんごぶが出来ただけなの？ 傷はない？ 気持ち悪くない？」

「これくらい大袈裟ですよお父さま、お母さま。」

「「いけません。」」

「は、せこ。」

やつてしまひました。

浮遊魔法を使えるようになつたので試してみた。飛んでみたりそれはもう気持ちよくて。

つー。

『急降下～そして、それ～。』

と、木の枝の下を潜り込んだら頭をぶつけてしまひました。

幸い覚えたての魔法でしたので高さも速度もかなり制限していましたから。

おでこにたんじぶが出来たへりこで済みました。

ちなみに例えば敵を後ろから羽交い締めにして。

と、猛烈に舞い上がり、そしてぐるぐると反転して。

『墜ちる一つ』

と、叫び掛け声とあげながら急降下をし、地面すれすれで自分だけ離脱。

そして敵は地面に頭からびっかーん…となる訳なのですが。

これを食らったら驚異の回復力を持つ才人さんでも耐えられないと思つのですけれど。

「どうしよう？」

あ、真面目に考えないでくださいね。

もしかしたら頭をぶつけでおかしな事を口走つてゐるだけかも知れませんので。

「おー、おおおおお待たせいたして申し訳ござりません…」

「遅いわあ！ わたしビアトリスの治療に取り掛からんか！

我が愛しのビアトリスの治療に失敗したら貴様の命は無いと思え！

いや、貴様の一族郎党皆殺しだ！ いいな！」

「はつ、はい、はい、はい、はい！」

お父さま、わたくしをそこまで大事に思つてくだされのは嬉しいのですが。

脅しが効き過ぎて水のメイジさんの手が振るえまくつてしまつてしまふ。

あれでは例え水のスクウェアメイジでもまともな治療は出来ないかと。

しかし白衣を着た震える手を見てみると

わ わたくしの前世のアリカラガモガモガモガモと黙こく坐されて。

あ あれば志れもしない小学校4年生の冬。

インフルエンザに罹ったわたくしは近くの個人病院に行き。

さしたる待ち時間もなく診察室に通されると。

そこには何故か数年前に引退したはずのおじこけやん先生が椅子に座っている姿が。

そしておじこけやん先生は。

『あ～インフルエンザだね～婦長さん、あれ持つて来て。

そして婦長さんからおじこけやん先生に手渡されたのは一本の注射器。

そしておじこけやん先生はそれを震えた手で。

『今から注射するからね～痛くないからね～

と、言いながらわたくしの腕に突き刺そつと徐々に近付けてくる。

迫るプルプルプルプルプルとめっちゃ震えている針先。

逃げようにも婦長さんがガツチリとわたくしの身体をロック。

そして震える針先とわたくしの腕との距離が5・4・3・2・1・インパクト。

「じつ、じつしたんだベアトリス！ あつ、貴様、娘になにをした

「二つ、二ついいえなにも！ なにもしておりません。」

「嘘をつくなあ！ そこになおれ！ 首をはねてくれるわあ！」

「ひつ  
ひい  
い  
い  
い  
い  
い  
！」

「あなた！ 今はそんな事よりベアトリスが！」

「そつ、 そつだつた、 ベアトリスや大丈夫か？」  
くんだ！」

「あわわわわわ、ちゅ、注射器こわい注射器こわい震える注射器こ

わい。

お、お母さま、お母さまあああー、いわあああああああー。

「おお、よしよし、可哀相にベアトリス。」

「お、お父さまの胸も空こてこらんだが、ベアトリスや。」

「あなたー。」

「むつ むつ。」

まさか、この世界でも母親の胸でマジ泣きをやる事になるとは思  
もよつませませんでした。

恐るべし負の遺産、つゝ 注射器にわい。

## 4話 主の勤め（前書き）

かいせ～しました。

上には上の、下には下の苦勞があるんです。

では真ん中の人は？

## 4話 王の勤め。

みなさま、『おげんよひ。

ベアトリス、10歳になり独り立ちいたしました。

と、言つても生活とかの面ではありますよ、魔法です魔法。

先日、魔法の家庭教師の先生方から。

『 もへ、わたくしどもが姫さまにお教えする事が『ござりません。』

と、免許皆伝をいただいてしまつたのです。

それにもしても齡10歳にして火、水、風、土の4系統魔法及びコモンマジックの全てを習得してしまつなんで。

自分の事とは言え呆れ返つてしまつます。

あの悪戯神様は加減と言つものをびびり存知ではないようですが。

しかし、これはもうトリスティンの魔法学院に留学しなくてよいのではないでしょうか？

まあ、こればかりはお父様が決められる事なので。

わたくしがあれこれと考へても仕方ありませんね。

でも、魔法学院には通つてみたいです。

それは何故かと申しますと。

公女と言つ立場の上に魔法の天才と言つ大層なレッテルをいつの間にか貼られてしまい。

そのせいでみなさんから腫れ物扱いされているので。

わたくし友達と呼べる相手が一人もいないのです。

はあ 魔法学院に通える歳まで後5年ですか 。

長いです。5年つて歳月は。

あ、「はじめんなさい、つにグチを言ひてしまつました。

えつと、それでですね。

魔法の授業が終わつてしまつましたので。

これからはその空いた時間に自分なりの創作と言ひますか。

独自で魔法の技術を昇華させて行ひたいと思つておつまじで。  
お父さまにお願いしてこの世界各地に舞つてゐるやも知れない魔法  
の文献や。

貴重な書物を取り寄せているといいなのです。

上手く行きましらば、それみんなさまの前で、披露させていただきま  
すね。

あら？ ノックの音？

誰か私の部屋に来たよつですね。

夕食にはまだ早い時間ですしなに用でしょ、

「どうぞ。」

「失礼いたします。

大后様が姫さまをお部屋にお呼びになられておられます。」

「なに用かしら？」

「はい、なんでも次の晩餐会の時のお話をされたいとかだそうでして。」

「わづ、ではまいりますか。」

そうして私は侍女を伴いお城の廊下を歩いていくと。

「この花瓶がいったいなんエキューすると思つていいのだー。」

なにやら男の人の怒鳴り声が聞こえて来ましたので。

わたくしはその声が気になり声のする方へ歩いて行くと。

「うわあ、あの貴族に田をつちられるなんてあの子も運悪こわね。」

「わたしも前に同じ田に怒鳴られた事あるけど、終わるまでヘタすじや半田はかかるわよ。」

廊下の曲がり角から先を覗いている侍女らん達の後ろ姿が見えました。

「いつから先程から聞こえて来る怒鳴り声はあの曲がり角の先から聞こえてこりますね。」

なにがあつたのかちょっと尋ねてみましょう。

「あなた達、ここをじてこのへんの？」

「なつて、貴族様にハツ当たつたれでこのあの子の事をじてから心配しているのよ。」

「ふー、人と話す時にお尻をじて前に向けたまはお行儀よくありますね。」

まあ、それより今はハツ当たりと言つ方が気になるので。

「ハツ当たりなら怒鳴つていてる方に非があるのに、なのに何故止めに入らないの？」

「ば、ばか言わないでよー。いくら相手に非があつたとしても相手は貴族様よ貴族様！」

「ばかとは失礼ですね、ばか言つ方がばかなんですよー。」

「やつよ、いくら相手がわざとあの子を転ばせて運んでいた花瓶にひびを入れさせたからって。」

「わたし達平民が貴族様に文句を言える訳がないじゃない！」

原作でギーシュさんも香水の事で言い掛けを付けてましたけど。

この世界はあんな理不尽な行いが貴族と平民との間で当たり前のように行われている世界でした。

「このまま見過ぎるのも後味が悪いですし。

理不尽な言い掛けりを付けている人は嫌いなので止めさせますか。

さて、相手はプライドの塊と言つてよい貴族。

どう上手く場を収めたものか。

そうですね、わたくしの立場を使い怒鳴られているあの侍女さんを呼ん。

「死ね！ 貴様など死んでしまえ！」

「申し訳ございません、どうぞお許しを。

「いいや、許せん！ これは姫さまのお部屋に飾る花瓶だと聞いていたな貴様！」

「は、はい。」

「ならばこの花瓶を傷を付けたは姫さまに傷を付けたも同じ事！ この罪、どう償う！」

「や、それは、、いつ、一生かけても弁償させて。」

「はっ！ 弁償と来たか、貴様が一生稼いだてこの花瓶のかけらすら手が届かぬわ！」

貴様の変わりなどいくらでもあるのだー、死んで償えー！」

あの野、また言つまししたね。

「ちよ、ちよっと、ヤバいんぢゃないの？」

「ど、ビビビビビ。」

と、慌てふためく侍女達にわたくしさ。

「あなた達、そこをどきなさい。」

「はあ？ まさかあんた止めに入るつもつじゃないわよね？」

「やめなさい、そんな事したらあなたまでヤバい事になるわよー。」

「ふう、その方いら、こつまで主に腰を向けて口を利くつもつか！」

「「くひ。」」

侍女達が恐る恐る振り返ると。

「「「べへ、べべべべベアトリスわー。」」

「「まつー度言ひ、ルーをじきなさい。」」

「「まつ、まひー。」」

勢いよく飛びのく侍女達を横目にわたくしは。

身体を震わせながら平身低頭している侍女の傍へツカツカと歩いて行くと。

怒鳴っていた貴族の男が「ひひひ」と氣づき。

この者が大事な花瓶を、とか、わたくしからも怒って、とか、言つているようですが。

そんなものは無視です無視！

「あなた、顔を上げなさい。」

「あ、あの私、だ、大事な花瓶を傷付けてしまー」

こんなに顔を泣き腫らせてしまつて、かわいそつこ

さて、この貴族の男、たしか名前は、忘れましたけど爵位は男爵だつたはず。

「あなたが謝る事はないわ、そつでしょ、男爵?」

そつ言いながらわたくしがキッと睨むと男爵は顔を青ざめさせた。

「ひ、姫さま、お、おつしゃられている言葉の意味が、。」

「あ? シラを切るつもりなのかしら?」

「し、シラと言われましてもなんの事や?」

その態度を見てわたくしは両手を腰に当てて胸を張り。

原作でもベアトリスがやつていた、そつですね、ツン系女子が偉ぶるところによくやるあのポーズです。

何故なのかは知りませんけど、わたくしが怒る時とかは決まり何の格好をしてしまつのです。

私の中のベアトリス成分がさいつたせるのでしょうか？ 謎です。

「わたくしね 見ていたのよ、あなたが彼女に足をかけてわざと転ばせたところをね。」

「や、そんなはずは！ ちゃんと周りを確認してから せつー！」

あつさつと語る口落ちましたこの男爵。

「へえ、こつこつしゃべっていたのね。」

「や、その。。」

わく、息を大きく、すう～～～と吸って。

「主が財産を己が憂きを晴らす為に利用するとは何事か！

まじでやつの悪事が主の知るところとなつたと嘆息を認めるどころか。

シラを切らつとすると、それでもその方はクルテンホルフの貴族か！

この罪、決して許されるものでは無いぞ！

その方！「が命を持つて罪を償うがよい！」

「 」。

おや？ この人ボロボロと泣き出してしまいました。

泣き落としをしようとしてもその手には乗りませんよ。

あなたは今まで立場や権力を笠に着て悪事を働いていたのですから。

然るべき罪を償つは当然の事！

ましてや、たかが花瓶一つで人に命を断てと口にするは絶対に許しません！

あなたに死の辛さがわかりますか！

あなたに死にたくないでも死んでしまった者の気持ちがわかりますか！

あなたにわたくしの気持ちがわかりますか！

あなたにわたくしがどれ程あの場所で辛い思いをしたかわかりますか！

あなたに！ あなたに、あなたに 。

「姫さま。」

そんな心配そうな顔をしなくても大丈夫ですよ侍女さん。

わたくしが来たからにはもう大丈夫ですから 。

あれ？ なにか頬を 涙？ わたくしは泣いているの？

もしかしながら侍女さんが心配しているのは、わたくし？

助けに来て心配されるとほ、わたくしはなにをやつてこるん

でしょう。

ふう　　でも、そのおかげか頭に上がっていた血が下がったみたい  
いです。

命を持つて償えと言つのは言ひ過ぎました、取り消しましょう。

それで、この場合はどう取めたものか。

花瓶なんて惜しきもあつませんけど。

主の所有物を部下の私欲に利用されたままお咎め無しと言つのは沾  
券に関わります。

かと言つて余り厳しい処罰を下すと。

『たかが平民一人の為に、我ら貴族が罪に問われるとは何事か!』

と、わたくしに物を言えない貴族達がこの侍女に嫌がらせをする危  
険も。

うへん、どうしましょう。

八つ当たりの罪は当人が侍女達に謝罪するとしても。

主の所有物を私欲の為に利用し傷付けた罪は。

ヒビが入った花瓶ですか。

そうだ、これなら！

「花瓶をこれへ。」

「は、はい。」

侍女さんから花瓶を受け取り顔の前まで持ち上げてから手を放すと。

「「あつー。」」

当然、花瓶は重力に引かれて床へと落ちてカシャーンンと音を立て割れてしまいました。

「 」

「 」。

な、なんですかあなた達のわたくしを見るその目はー。

これは怒り心頭で暴れ出したとかじゅあつませんからねー。

わたくしはわたくしの意図を上手く察してくれればよいのですが。

「 」の花瓶はベアトリスが手を滑らせて翻つてしましました、いいですね？」

「 」。

む、無言ですか では、もつ一回囁こめます。

「 」の花瓶はベアトリスが手をー 滑らせて翻つてしまいましたー。  
「 」

「 は、はー、あつがと「わー」ます。」

よし、侍女さんは察してくれました。

でも、ありがとひまつちやダメですよ。

さて、残るは。

「 はつ、ははあーつ！ ベアトリス様の恩情、ありがたき幸せにー。」

ふう、なんとか察してくれましたか。

「 いたびだけですよ、しかし花瓶が割れてしまつたと云つてすべての罪が消えたわけでは。」

「 はつ！ わたしが今まで迷惑をかけた者達に詫びをばー。」

おお、今日は話が早い。

さて、この処置のしかたで侍女さんに不満は。

うん、表情とか雰囲気で判断する限りどうやらなにかあります。

しかし、貴族なんて気難しい生き物を毎口相手にしているせいか。

侍女さん達の方が機敏に優れていますね。

さて、もう大丈夫そうですがお母さまのところに向かうとしますか。

つこでにあの角からじらりの様子を窺つてゐる侍女達には花瓶の後始末を命じましょ。

人にお尻を向けたまま口を利く無礼を働いた罰です。

今のうちに正しておかないと後で取り返しのつかない事になるやもしれませんからね。

「あ、あの、姫さま。」

「ん?」

「あつがとうございました!」

「よい、主の勤めを果たしただけよ。」

と、わたくしはその場を後にしたのでした。

そして後で。

「主の勤めつて、うこぎやー！ 恥ず！ めつちや恥ず！ 恥ずーー！」

と、自分が口にしたセリフを思い出して羞恥に身悶えたのでした。

## 5話 双月の下の出番ご。 (前編)

改正しました。

「メ〜だされた方、ありがとうございます。」

後でお返事をさせていただきますね。

## 5話 双月の父の出会い。

みんなも、『じあざんよひ。

ベアトリス、胸の辺りが気になつて来た12歳になりました。

本日、わたくしはお父さまに連れられラグドリアン湖の湖畔で催された園遊会に来ております。

そしてそこにある人物に出会ひてしまひ少々いや、かなり怖い思いをしてしまつたので。

心の安らぎとつか癒しを求めていつか群からボーッと湖面を眺めております。

はあ まさかアレに田を付けられていたとは。

ちなみにアレとは誰を描していると思します？

ヒント、青髪に青ヒゲの美中年と云えます。

そうです、無能王とか狂王とか呼ばれているガリア国王ジヨセフさんです。

そしてこのジヨセフさん。

「いつたになにしに魔家の天幕までわざわざ足を運んで来たのかと言つと。」

『おお！ あなたがベアトリス姫か！

魔法が一切使えない無能の身だけに魔法の天才と謳われる姫に一目なりともお会いしたく。

「本日は無礼と承知しつつも、いつやつてまにいつたしだいだ。

いや、お会い出来て本当に光榮だ、まつまつまつまつーーー！」

ええ、知らない内にわたくしづはジヨセフさんの興味をひいていたみたいですね。

そして。

『いやいや、その歳でスクウェアクラスのメイジとはまるでここを見ているようだ。』

と、終始意味深な目で見られ。

『ベアトリス姫とはそのうちお会いする機会があると思つが。

その時はよしなに、ではまた、はつはつはつはつはつ』

社交辞令と信じたいです。

しかし、もしわたくしが勇氣を出して歪む前のジョセフさん。

あなたは虚無の扱い手なので4系統魔法は使えないのですよ。

それとシャルロットのパパだって聖人君子ではなく内心あなたに嫉妬しているんですから。

すれ違ひな関係をさつさと修復した方がいいですよ~。

なんて今から数年前にでも言つたら。

ガリアのみならずハルケギニアの歴史 자체が大きく変化していくやもしかませんね。

でも、ヘタレなわたくしにはそんな事は出来ませんでした。

ごめんなさい、シャルロットのパパさん。

こんな薄情な小娘ですけど成仏される事を祈らせていただきます。

ん？ 背後から人の足音が 。

当家の者がわたくしを連れ戻しに来たのでしょうか？

「やあ、遅れですまないつて、きみは確かクルデンホルフ大公国のがアトリス公女だったね。」

「う、ウエールズ皇太子殿下。」

背後から現れた人物はなんとわたくしの遠い遠い親戚である。

アルビオン王国のウェールズ・デューダー王子でした。

かなり前に一度お会いした事がありましたけど。

よく一目でわたくしがベアトリスだとわかりましたね。

やはりこの髪型でしょうか？

まあ、それはいいとして。

何故ここに殿下が？

ん？ 遅れですまない 待ち合わせ ラグドリアン湖

あつ！ アンリエッタ姫との密会イベです！ 早くここから立ち去らなければ！

「ベアトリス姫はこんなところで一人でなにをしていたのだい？」

「え、あの、しょ、少々気分が悪くなりましてここに休んでおりました。」

「なんと、それはよくない。

わたしがクルテンホルフ大公国の大幕までお送りいたそう。」

「あ、いや、今はかなり良くなりましたので、心配には及びませんです。」

「我らは親戚ではないか、そつ遠慮などせずともよし、ある。」

いや、手を差し延べられても困るのですけど。

「あの、お気持ちは嬉しいのですが本当に大丈夫ですから、はい。」

「姫がそつ言つなら致し方ない、しかし無理はなされぬ方がよいぞ。」

「

「いえ、じこで湖を眺めていましたらほんとーに気分が良くなりましてたのど。」

「せうか、もしゃラグドリアン湖に住まう水の精靈が。

苦しむベアトリス姫を見過しせず癒してくだされたのやも知れないな。」

いや、あの精靈さまにそれはないかと。

「モ、モウですね。

モ、モモと、それではわたくしはこれで失礼させていただきます。」

と、モモモとわたくしが殿下の横を通り過ぎ去ります。

「あ、姫に少し尋ねたい事があるのだが。」

なんて言いながら殿下が足を踏み出すとモモモは運が悪い事にわたくしのドレスの裾があり。

急ブレーキをかけられる形となつたわたくしは。

「ドレスの裾を踏んでるか……モモモ……」

なんて叫びながらの後に予想される痛みに恐怖し。

目を閉じ後方に倒れて行つたのですけれど。

いつまで経つても地面の感触が伝わって来ません。

それを不思議に思ったわたくしがおもむと皿を開けたところには。

「いやあ、大変失礼をいたしてしまつた。」

とてもバツが悪そうにしている殿下的顔がありました。

どうやら殿下がわたくしを助けてくれたようで

うわあー！ きつかけばどうあれ今わたくしのお姫さま抱っこされて  
るじやあつませんかーっ！

それも正真正銘の王手をまじ一

「いや、いや、いや、これはかなり貴重な体験と云つか夢が叶つ  
なんでもあります。」

「ベアトリス姫？」

「は、はい！」

「顔が赤いようだが、どうなされた？」

「え？ うう、これはその。。」

「やはりまだ！」気分が優れないのではないか？」

心拍数と血圧なら人生最高値をドンドンと更新していくはずです。

「よし、やはりこのままクルデングルの天幕までお運びいたそう。

「

「は、はい ゼひともお願いたしますって、それはダメーっ！」

本音は一分一秒でも長くこうされていたいのですけど。

今この瞬間もここに向かっているはずの方にこの状況を見られたら  
いろいろマズイ事になりそうですね。

名残惜しいですけど早く降りしてくださいな。

「べ、ベアトリス姫、そう暴れられては危ないぞ。」

いいから早く降りしてください。

あの人気が、あの人気がここに来る前にって、ひやあつ！

「ほら、危ないと言つたであろ？、怪我はないかな？」

「はい ウォールズさま 」

お姫さま抱っこされたままバタバタと暴れたら脚のみが下に落ちて。  
気付けは殿下の胸に抱き抱えられている体勢に。

ああ ヤバいです、頭がぽつつとしてきました つて、いかーん！

さつきよりマズイ状況になってしまったじゃないですか！

「、こんなところをアンリエッタ姫に見られでもしたら。

わたくしが泥棒猫扱いをされるばかりか。

殿下が浮氣者扱いをされて原作ブレイクになる危険が！

は、早く放れないと！

「う、本当に名残惜しいですけど。

あなたの事はわたくしを人生初のお姫さま抱っこしていただいた方として終生忘れません。

それではおさらばです、殿下！

「あ、あの、殿下、わたくしは。」

「遅れてごめんなさい、ウェールズ。」

なんでこんな最悪のタイミングで貴女は来られるのですかアンリエッタ姫さま。

そうして、自分のオトコが自分との逢い引きの場所で抱き合つていたオンナをアンリエッタ姫さまが逃すはずもなく。

「まあ、ウエールズ！ がベアトリス姫のドレスの裾をお踏みなられた。」

「ああ、本当に姫には申し訳ない事をしてしまった。」

「「つふふ、ウエールズーも、おつりゅうじゅうですわね。」

「むう、失礼を働いてしまった後だけに言へ返せぬな。」

「まあ、そこがウエールズーの可愛いところですけどね。」

「あ、アンリエッタ姫 び、びつされたのだ？」

「なにか今日はいつもと雰囲気が少し違うような気がするのだが。」

「あら、わたくしはいつもと変わりありませんわよ。」

「それよりウエールズー、アンリエッタ姫なんて他人行儀じやありません」と。

「いつものよひ、アソー、とお呼びにならね。」

「う、うむ。」

姫さま わたくし達の言い訳を信じていませんね。

それと自分達の仲を見せ付けようとしているのはわかりますが。

あからりわま過ぎて殿下、かなりひこちゅうておこりますよ。

「いや、しかし一国の姫のドレスを踏んでしまつて頭を下げただけと云ひませぬ。」

わたし個人のみならずアルビオンの名にも関わる。

そこでだ、当家から姫に代わりのドレスを用意するのでそれで許して貰えないだらうか?」

いや、許すも許さないもこれ以上わたくしに係わらないでください。

ほら、隣の人がわたくしをめつちや睨んでいるじゃないですか。

「え、えつと、お気持ちだけで十分ですから殿下。

それに安物のドレスですので、そつお氣になさらなくてください。」

「あら、さすがは当国の貴族達にもお金を貸せる程に裕福なクルテンホルフ大公国のお嬢さまですね。」

「。」

「そんな高級そうなドレスを安物と云ふ、一度で良いか口にしてみたいのですわ。」

「 」。

そして長時間に渡るアンリエッタ姫のチクチクとした口撃からやつとわたくしが解放された時には。

「うう 頭が痛いよう 頭がキリキリと痛いよう 」

肉体的にも精神力的にもボロボロになつておりました。

そんなわけで楽しみにしていた大自然の中で食べる夕食をそこそこに終らせたわたくしは。

「はあ ジョセフさんと言い、アンリエッタ姫をまと言い、ひどい目に遭わされました。

今日は書物を持って来ていない事ですし湖に浮かぶ双月を眺めてから寝てしまうとしましょうか。」

そう思いカーディガンを羽織り自分の天幕からてくてくと湖を見渡せる小高い丘に歩いて行こうとした時。

「あら、あなたはベアトリス姫じゃない。」

透き通るようなソブリックの声に振り向くヒカル。

「ライズさん。」

この時わたくしは。

田の前に立つ桃色がかつた美しいブロンドの髪をした少女と自分が。  
無いの親友となるとは思つてもおつませんでした。

6話 反省したけど後悔はない かも。（前書き）

改正しましたので投稿いたします。

## 6話 反省したけど後悔はしない かも。

「わたくしの魔法を見せて欲しい ですか？」

「ええ、クルーテンホルフの魔女と言われるあなたの魔法を、一度目にしたいの。」

「ま、魔女？ いつ、いつたい誰がそんな呼び方を？」

「誰って、みんなあなたの事をそう呼んでるわよ？」

「い、いつの間に。」

と、わたくしがショックを受けている時にルイズさんがボソッと小声で。

「あなたが魔法の天才だから自然とそう呼ばれ出したのよ。」

「ほんと、羨ましい限りだわ。」

「え？ ルイズさん今なんて？」

「ううん、なんでもないわ。」

「それでどうなの？ 魔法を見せてくれるの？ くれないの？」

「べつに魔法くらい構いませんけど。」

「ほんとっ、ありがと、嬉しいわー。」

そんなピコンピコンと跳びはねて喜ばれるとひょっと恥ずかしいんです。

「えっと、それじゃあ、ここですと当家の天幕に近いので場所を移しますね。」

「なんで?」

「護衛付きでお見したくなかったのでこいつをさりと抜け出して来まして。」

「あなたもやるわね。」

あなたも? あ、そうですね。

公爵家のご令嬢がこんな夜更けに一人で来られたと言つ事は。

ルイズさんもわたくしと同じくですか。

そして場所は移りラグドリアン湖の畔へ。

「……なら人間を気にしなくてもいいですね。」

「なにをお見せすればよろしいですか？」

「その前にひとつといいかじり。」

「はい？」

「わたし達、今日初めて会つたばかりだけど。

歳も近いんだし遠いと云つても親戚なんだから堅苦しい話し方しないでいいわよ。」

あ、『ジヤヴ』。

ほんと今田さまよく親戚に会つたんですね。

ん？ いつも『ジヤヴ』やつたことも遡れば母の繋がりが。

い、これは考へるのやめておきましょ。

「えっと、それではルイズさんと？」

「ルイズでいいわ、わたしもあなたをベアトリスと呼ばせてもらひますから。」

「はあ、わかりました。」

「えっと、それじゃなにか簡単なのから見させてくれないかしら?」

おや? ルイズさんの性格なら派手なのとか綺麗なのをリクエストされると思っていましたが。

遠慮されているのでしうつか?

ならば簡単だけど派手なのを」「披露させていただきますか。

さて、ちよつとずかしこと湖がありますので水の系統魔法を…

「それでは、ウォーター・シールド!」

目の前に作り出したは、高さも幅も100メイル程度の薄く透き通った水の壁。

「詠唱無しでこの規模の水の壁を一瞬で。」

驚かれているみたいですね。

次行きますよ～。

「ウォーター・ウェイツプ！」

手には長さ50メイル程度の水の鞭。

「なにこの手元から九本に枝分かれした水の鞭の動きは？」

ではでは、次行きますよ～。

「火の系統魔法を行つきます！ 発火！」

杖を頭上でぐるりと回すと現れたのは2メイル程の大きさの1-2個の炎の塊。

そして杖を夜空に浮かぶ双月を指して掲げ。

「たーまやー！」

「たまやつてなによ しかもドーンってカラフルな色の爆発

してゐし。

さて、真打ち行きます！

「パクリ魔法」「もういいわ！」へ？」

突然の大声に振り向くと、そこには俯きながら肩を震わせるルイズが。

「ルイズ？」

もういいわ。

あの  
お氣にで  
わなか  
たですか?

# わたし帰る

「あ、そこ、ちはだめです！」

「ハナタ」

「怪我はありますか？」 わあ、わたくしの手に掴まつてんだ、

「 なんなのよ。」

「 え？」

「 なんなのよ、」 の差は、

「 ルイズ？」

「 わたしとあなたのは、なにが違つと、

ルイズの顔から、ぽロ、ぽロと落ちて、いる水滴は、もじや。

「 あなたは、なんで、そんなポンポンと、魔法が使えるのよ。」

「 。。」

「 おかしいじゃない、不公平じゃない、なんでなのよ。」

「 。。」

「 なんでわたしは、魔法が使えないのよ。」

魔法の天才のあなたならわかるでしょ。」

ねえ、なんでか教えてよ。」

そうでした。

原作知識があるだけに虚無の扱い手と重なりイメージが強くて忘れていましたが。

始祖の秘宝と水のルビーを手にする辺りまでルイーズは。

ずっと辛い思いをされていたのでした。

今思えば、わたくしに魔法を見せて欲しいとわざわざやって来たのも。

魔法を使いたいが為の一心で、きっと、藁にも縋る思いでやって来られたのでしょう。

「黙つて立つていないでなんとか言いなさいよー、ねえ!」

「わつー、冷たつー!」

考え込んでいたところを引っ張られて、浅瀬で女の子座りをするような格好になってしまいました。

夜の湖は水温が低いのでお尻がすぐ冷たいです。

「あ、『めんなさい』。わ、わたし そ、そんなつもりは」

わたわたと、わたくしを抱え起こそうとするルイズの顔には。

やはり泣かれてましたか。

しかし、いや、ほんと、なんと言いますか。

身体は12歳ですけど、精神は前世を合わせればルイズより一回り以上年上の2じゅう。

い、今氣付きましたけど、わたくしの精神実年齢は、みつ、三十路前のおば。

と、とりあえず、魔法が使えないルイズに対して大人氣ない事をしてしまいました。

「ルイズ、ちょっとこっちに来なさい。」

「え？」

「いいから来なさいつてば。」

ルイズの頭に手を回してぐいと引き寄せせて自分の胸元に抱え込み。

「いめんなさい、ルイズ。

あなたの事も考えないで魔法を見せびらかすような事をしてしまつて。」

「 。」

「お詫びと言つたらなんですか？」

こんな胸で良ければこいつ泣いてやつてください。

いっぴ泣いて今までのルイズとおなじやいまじゅう。」

「今までのわたしと？」

「うわあー！ 涙目ルイズの上目遣いの破壊力ハンパないです！」

「ええ、いっぱい泣いて魔法が使えないで辛い思いをしてきたルイズとお別れをして。

新しいルイズといふにちはをしおりつ。

# 「新しいわたし?」

「お手伝いします、あなたが魔法を使えるようになるのを。」

ほんとに。

はい、わたくしはケルテンホルフの魔女なのでしょう？

その実力を持つてあなたが魔法を使えるようにして差し上げます。」

4系統魔法は無理でしょ？！セミジックならなんとかなりそうだからね。

「ちい姉わまと比べよしがなこくらこ貧相な胸だけど、しばらへ借りるわ。」

うひさいです、黙つてわひをと泣けです！

「よしう。」

ふふ、いつも頭を撫でてあげていると歳の離れた妹か娘を持つた気分になつて来ますね。

悲しい時や辛い時には泣くのが一番です。

あの場所で自分の運命を振り返り。

なんども泣いたわたくしが言つのだから間違いありません。

ん？ 華奢な身体に見合はず以外と力ありますね。

背中に回された腕が身体を締め上げて来て苦しいのですけど。

うつ は、肺から酸素から搾り出されて。

。 だ、だめです、いくら酸素を取り込もうとしても肺が膨らみません

ぐ ぐるじこ うつ ガク。

「あーすっかりしたわって、ちょっと、あなた大丈夫?」

「 はつ あれ? 受付の順番待ちをしていたはずなのに?」

「 受付え? なんの事か知らないけど、そろそろ水から上がりない?」

「 そう言えば 。」

確かにかなり身体が冷えてしましたね。

このままじゃ風邪をひいてしまいます。

しかし、自分で言つておきながらなんですが。

泣いたらほんとカラッとしましたね~。

「ほら、わたしの手を掴んで、また転んだら嫌でしょ。」

「あ、はい。」

ルイズに手を引かれてザブザブと浅瀬を歩く。

なんか立場が逆のよつな氣がしますけど。

まあ、結果オーライと言つていいでいい。

「発火。」

「わあ～温かい。」

濡れたまま天幕まで戻ると夜風で風邪をひきそうなので。

近くに頃がつて手頃な木を燃やして暖を取る事にしました。

「ねえ、さつき言つた事、本当なの？」

「え？」

「わたしが魔法を使えるよつとしてくれるつて。」

ああ、場の雰囲気に流されてそんな事を口走つてしましましたね。

さて、いまさら原作ブレイクさせるのは嫌なので、ダメですとは口

が裂けても言えませんし。

それにはこの歳であれ程の精神的苦痛を抱えていた人を放つてはおけません。

しかも追い詰めたのが自分と来てますからね。

えっと、今のルイズにコモンマジックを使えるようになれる方法は。

虚無の覚醒 それは始祖の秘宝とか必要になりますから。

ん？ そう言えれば原作ではじつはルイズが「コモンマジックを使えるように。

あ、自分が虚無の系統と自覚して。

と、なると。

わたくし演技力には自信ありませんが、やるしかありませんね。

「ルイズは魔法を使おうとするといつなるんですか？」

「なんでそんな事を聞くのよ。」

「魔法の使い方を教えるにしても現状を知らないとダメだと思いまして。」

「 爆発 」

「 爆発ですか？」

「 そうよ。 」

「 4系統魔法、すべてですか？」

「 そうよ、悪いー。 」

「 あの、なんで爆発するんですか？」

「 魔法が失敗したからに決まっているからじゃないー。 」

「 普通、魔法を失敗したら爆発しませんよ。 」

「 。。。 」

「 例えば火の系統のメイジが苦手な水の系統の魔法を使おうとして失敗したらどうなります？」

「 それは 。 」

「そ、魔法が発動せずに起きませんよね。

でもルイズは爆発する、すなわち魔法が発動している事になります。

「

「あ。」

「もしやルイズは特殊な系統の魔法使いなのですか？」

「特殊な？」

「ええ、伝説とされている虚無の。」

「わたしが 虚無の？ な、なにを言っているのよ。

そんなわけあるわけないじゃない！」

こつから嘘で塗りかためます。

「でも、わたくしがルイズから感じられる力は、とても特殊なものに感じられて仕方がないのですけど。」

「力が？」

「はい、4系統魔法いずれの使い手とも違う力を感じられます。」

「。」

「ルイズがわたくしに囁いた言葉ですけど。

わたくし達は遠い親戚となりますよね。

そつ、始祖ブリミルの血を受け継ぐ親戚に。」

「あつ。」

「もしかしたらわたくしは始祖の魔法の才能を引き継いだのかも知れません。

しかし始祖が使つたと言つ虛無の魔法を使つ事は出来ません。

何故なら始祖がそつであつたようだ。

虚無の扱い手は他の系統の魔法を一切使つ事が出来ないからです。」

「。」

「おやう、いや、ほほ間違いないでしょ。」

あなたは虚無の扱い手ですよ、ルイズ。」

「わたしが 虚無の扱い手。」

「ええ、羨ましい限りですよ。」

「わたしを羨ましい？ あなたが？」

ルイズの中でわたくしがどれだけ高評価をねじこむのでしょうか?

「だつて、虚無ですよ、虚無。

わたくしがいくら頑張っても使えないのをルイズは使えるやも知れ  
ないんですもん。」

「 。

「ルイズ、わたくしにあなたの魔法を見せてくれませんか?」

「わたしの魔法を?」

「ええ、伝説と言われる虚無の魔法をです。

それがわたくしがあなたに魔法の使い方を教える授業料と言つ事で  
いかがですか?」

「 あなたって、わたくしよつ年下なのこいつかりしてゐわね。

「そうですか?」

「いいわ。」

「え?」

「わたしが虚無の魔法を使えるようになつたら、あなたに一番に見  
せてあげる。」

その代わり、しっかりとわたしに魔法の使い方を教えてなさいよ。」

「ええ、約束ですよ、ルイズ。」

「これからよろしくね、ベアトリス。」

原作より少し早いルイズの虚無の扱い手としての自覚。

それが今後にどう影響するかはわかりません。

けど、一人の少女が受けるはずだった苦痛を避ける事が出来たのだけは確かです。

## 7話 蛍火。（前書き）

改正しました。

おふとんが恋しい季節がやって来ましたね。

冷え症のわたくしには朝晩がとてもとても辛いです。

## 7話 蛍火。

園遊会からほんの少しばかり月日が経過した頃。

「ん～～～、ライト！　ライト！　ライト！」

ヴァリエール公爵家の敷地の中から透き通るようなソプラノの声が聞こえてきました。

声の主はこの家の二女であるルイズ。

美しい縁の生の上で何をしているのかと言つと。

先日開かれた園遊会で出会った少女。

ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルテンホルフに教えられた方法で魔法の練習をしている最中なのです。

その少女はルイズにこう言いました。

『遠い遠い国の話になりますが。

その国には有り余る程のチャク ま、魔力を持つていたけど。

初歩の初歩の魔法さえ満足に出来ずに、みんなからいつもばかにされていた人がいました。

でも、その人は自棄にならずに自分を信じて頑張つて。

最終的に世界を救つた英雄とか黄色いなんとかとまで言われる立派なしの ま、魔法使いになる事が出来ました。

このハルケギニアに例えて言つたら。

「モモンマジックも使えなかつたメイジがスクウェアクラスのメイジどころか。

始祖ブリミルみたく凄い魔法を使つたり、複数の使い魔を使役するまでになつたみたいなものです。

信じられないかも知れないけど、コレは本当のお話ですよ。

だからルイズも自分を信じて杖を振るつてください。

あなたは絶対にすごい魔法使いになれるから。

自分の知らないところでクルデンホルフの魔女とか言われてわたくしが保証します。

あ、でも、虚無の扱い手と言つのはいづれ時が来るでしょうから。

それまで一人だけの内緒にしましょうね。

じゃないとわたくしまたく知らなこと」ついで「一つ名を付けられたり。ロマリア辺りから教祖さまへ手に手を振つてくださいって、ハメになるやも知れませんからね。

それじゃまずは頭の中で杖を振るつたらこうなるってイメージを。強くしつかりと想像するところから始めましょう。

はーい、今あなたは真つ暗闇の中に立つてあります。

そこで明かりが欲しいあなたがライトを唱えると。

ほら、杖の先がだんだんと明るくなつて来て辺りに光りが広がつて行きました。

と、まあ、こんな感じでやつてみてください。 )

少女の教え方は決して上手いとは言えませんでした。

いえ、むしろ下手と言つてもいい部類に入るでしょう。

しかしルイズは魔法を使えない自分を決して笑わずに。

親身になつて教えてくれた少女の教えを愚直なまでに実行しました。

そしてその頑張りは彼女を裏切れませんでした。

「うへへへん、ライト！ あ、また、ちょっとだけ光った！」

光と呼ぶには余りに弱々しい螢火のような光。

しかし彼女とつてそれはとてつもなく眩しい輝きを放つ光でした。

（自分は虚無の扱い手で魔法を使えるんだって信じる事が大事。

あなたが言つていた通りだつたはベアトリス。）

「光よ、光よ、光よ！ うへへへん、ライト――！」

やがて口は傾き。

「あら、お帰りなさいルイズ。」

「ちい姉さま？ わたしの部屋の前でなにをしていろの？」

魔法の練習を終え自分の部屋へと戻つて来たルイズに話しかけるの

は。

ルイズが成長したら胸以外はこいつなるであらわ姿をした。

ヴァリエール公爵家の二女のカトレアでした。

「うふふ、今日も魔法の練習を頑張って来たみたいね。」

「ええ、今日は10回も光ったのよー。」

「まあ、それはすこじじゃない、うふふ。」

「ちい姉さま？ 先程からなにを笑っているの？』

「はい、これ。』

「手紙？ あつ、ベアトリスからだわー。』

「やうよ、これあなたに渡しに来たの。』

「ありがと、ちい姉さま。』

(ありあり、余程ベアトリスさんの事が気に入ってるよしね。)

心から嬉しそうな顔をして手紙を受け取る妹にカトレアの悪戯心が  
刺激され。

「私もベアトリスさんにお手紙を出さなければならぬわね。」

「へ？ ちい姉さまがベアトリスに？」

「ええ、いつも妹がお世話をなつております。」

「そそつかしい妹ですけど末永くよろしくお願いいたします、つて。」

「は？」

「うふふ、ベアトリスさんと幸せになれ、ルイズ。」

「はあ？」

「あら、隠れ無くていいのよ、ベアトリスさんの事好きなんですよ？」

「な、ななな何を言つて居のちい姉さまー。」

「わ、わわわ私達そんな仲では ちい姉さまっ。」

姉の笑みが何時もと違う事にルイズが気付く。

「か、からかつたわね、ちい姉さまー。」

「あら？ もうわかつちゃつた？」

「ひどーーー！」

「あなたの嬉しそうな顔を見ていたらちょっと悪戯したくなっちゃったのよ。」

「もおーー！ でもいいわ許してあげる。」

「あら？ やけにあつあつとしてるわね？」

「だつて早くベアトリスのお手紙を読みたいのですもの。」

「あらあら、お熱い事。」

「ちこ姉ちゃんー。」

「つふふ、でも少し悔しいわね。」

「なにが？」

「「めんなさい。」

「わたし達があなたに魔法を使えるように出来なかつた事よ。」

「あなたはなにも悪くないわ、謝るのは私達の方よ。」

「ううん、そんな事ないわ。」

「ううん、そんな事ないわ。」

ちい姉さまだけじゃない、お母さまだってお父さまだって。

あのヒレオノール姉さまだって。

わたしの為に一生懸命になつてくれていたのわたし知つているわ。

「ルイズ。」

「だから謝りないで、ちい姉さま。」

「ありがとう、ルイズ。」

「ううん、わたしこそありがとう、ちい姉さま。」

「それにしてもあなたがベアトリスさんとお会いしたのつて園遊会の時よね？」

それからまだ10日も経つていなーのにあなたに魔法を使えるよつにさせるなんて。

クルーテンホルフの魔女の名はさすがね。」

「わたしもそう思つわ。でも、実際に会つと全然凄そつと見えないのよ。」

「まあ、それはベアトリスさん失礼じゃなくて。」

「ちい姉さまもベアトリスに会えばわかるわよ。」

「 もうねえ、機会があればお会いしてお話をしてみたいわね。」

「 じゃあ、お手紙のお返事にそつ書きしておくれわね。」

「 あまり無理を言つて困らせてはいけませんよ。」

「 大丈夫よ、あつちもあたしと会いたい会いたいって言つておくれるもの。」

「

「 あらあら、」さういつね。」

「 だつ、だから違つて言つておじやない、もう一。」

「 うふふ。そう言えば、暗くなつて来たからライズの魔法で明るくしてくれないかしら。」

「 いいわよ、よく見ていてね、ちい姉さま。」

「 うへへへん、ライ———。」

「 まあ、とっても温かい光ね。」

まだまだとても小さな螢火。

しかしそれは、ヴァリエール家に笑顔をもたらす光りでもありました。

8話 魔法の都へ。（前書き）

新話と一緒にしまーす。

ちと、寒くなってきた今日この頃が嫌いっす。  
手荒れする前に無洗米買おつかなあ。

わたくしとルイズが出会ってからおよそ2年の月日が流れた春のあ  
る日。

わたくしの住む城の一角に大勢の人達が集まっていました。

その人集り中に位置するのは数台の竜籠。

その中で取り分け豪華かな装飾で飾られた1台の横にこの国の王室。

つまり、わたくし達家族の姿がありました。

「出立の準備が整ったようですね。」

「…………ベアトリスや、その、わざわざトリスティンまで「あなた  
ー」「ううう。」

「何度も同じ事を言えば気が済むのですか！」

「う、うむ、しかし本当に一人でよいのか？」

「はい、お供や警護の者を引き連れて行つたらクルテンホルフの力を見せ付けるどひろか。

あの国の姫はよい歳をしてお守りが必要なのだと誇りを受けてしますわ。」

実際、原作でギーシュさんもお金持ちは見栄を張るのが好きなのとばかりにしましたからね。

「むふ。」

「さて、そろそろ行つてまいりますわね。」

お父ちゃんもお母ちゃんもお元氣で。」

そう言ってわたくしは竜籠に乗り込み空の人となりました。

目的地はトリステイン王国にあるトリステイン魔法学院。

14歳になつたわたくしはこの春から親友であるルイーズの1学年下として。

トリステイン魔法学院に通つ事になつたのです。

「ふふ、あれだけ原作からこの世界が変わってしまったのを嫌つていたわたくしが。

自ら望んで変えようとしているのだから人とは不思議なものですね。

「

そうなんです、原作より一年早い留学はわたくしが望んだ事なのです。

人はなにかのきっかけで変わる事があると言いますが。

わたくしもまたルイズと出会い交遊を重ねる内に変わったのです。

わたくしが変わった事が出来た決定的なきっかけになつた事と言えば。

やはりルイズが魔法の練習のし過ぎで倒れると耳にし。

ルイズを見舞うべくお父さまの反対を押し切りラ・ヴァリエール公爵家へと向かい。

ベッドに横たわっていたルイズに治癒の魔法をかけていた時にした

聞いたルイズの心の声でした。

『ありがと、あなたのおかげで、いぶんと楽になつたわ。

これでまた明日から魔法の練習が出来るわね。

え？ しばらく休みなさいって？

嫌よ、休んだらあなたみたいなすばらしいメイジになるのが遅れるじゃ  
ない。

わたしは早くあなたみたいなすばらしいメイジになつて。

あなたがこうしてわたしの事を助けてくれるよ。

一回しか言わないからよ／＼聞きなさいよ。

わ、わわわたしも親友のあ、あああなたが困つていて、た、た  
た助けてあげたいのよ。

ん？ 傍きながら震えてどうしたのよ？

きやつ！ もや、急に抱き着いて来てどうしたのよ？ あなた泣  
いて。

うつ、ぐ、ぐるじい、息が出来ないから放して。

し、死ぬ、死んでしまう。

ち、ちい姉さま、ちい姉さま助けて ガク。』

ルイズの言葉が余りに嬉しくて、ついやり過ぎてしましました。

慌てて治癒の魔法をかけましたが、なかなか息を吹き返さないので。

前世の保険体育の授業で習つた人工呼吸をしてみたら蘇生に成功。

しかしお互いにファーストキスだつた為に。

その後でものすゞく気まづい雰囲気になつてしましました。

しかし、あの時はほんとくに焦りましたね。

もしルイズが息を吹き返さない時は。

責任取つてその場で一緒に死ぬしか無いとまで考えて人工呼吸しましたからね。

「待つてくださいね、ルイズ。わたくしもあなたと一緒に戦うか

「の日から一〇日の早朝。

女子寮のある部屋のドアをノックするルイズの姿があった。

「早く起きなこと朝食の時間に間に合わないわよ、ベアトリスー！」

「のわたしが起こしに来てあげてるんだから早く起きなさいよー。」

「ふあい？」

ドアの向いから現れたのは寝たいくをした寝巻き姿のベアトリスであった。

「せり、早く起こし来なさい。」

「ふにあ？」

しかしルイズは怒るでもなくベアトリスの手を掴みドレッサーの前に座らせると。

実際に手慣れた手つきで櫛でベアトリスの髪を梳かし始める。

そう、ベアトリスがルイズの言葉で変わったよ。」

ルイズもまたベアトリスの言葉を聞き変わったのだ。

二人は友人となつてからお互いの家に何度も泊まりに行つた事があり。

その時に朝が弱いベアトリスが寝ぼけてルイズの事を、こう呼んだのだ。

『もう あさですか ルイズおねえさまあ。』

これが末っ子のルイズのハートをがっしりと掴み。

これ以降ルイズはベアトリスの事を友人と言つより。

出来は良いがどこか抜けている可愛い妹として扱うようになり。

なにかにつけて世話を焼くよになつたのだ。

ちなみにラ・ヴァリエール公爵一家もルイズが魔法を使えるようになつたベアトリスを気に入つており。

ベアトリスが泊まりに来るとなかなか帰さないので。

クルデンホルフ大公はベアトリスをラ・ヴァリエール公爵家に行かせたくないのだ。

「これでよしつと、髪は自分で結えるでしょ。

わたしは着替えと制服用意しててあげるから。」

「ん~ありがとうございます~ルイズおねえさま~」

その言葉にピタリとルイズの動きが止まり、ふるふると震えながら。

「そ、そそそ、優しいルイズお姉さまに、かかか感謝しなさいよ。」

それから場所は生徒達が集う食堂へと移り。

「う~ん。」

難しい顔をするベアトリス。

「どうしたのよ？」

「やつぱつこの場所おかしくないですか？」

「場所？」

「わたくしの座っている席ですよ席。

今わたくしが座っている席はルイズの隣。  
すなわち2年生のテーブルの席ですよね？」

「それがどうしたって言ひのよ？」

「やつぱり、わたくしはあちらで食事を取った方が良いのではない  
かと思いまして。」

別に何年生はいいと言つ決まりは無いが。

決まりは無くても暗黙のルールと言つものはあるので。

そのルールに触れていると思つと居心地が悪いのだろう。

「なによ、あんたわたしの隣よりあっちの1年生のテーブルに行きたいくつてのー！」

ジロリと睨むルイズ。

「い、いえ、別にそいつ訳ではないのですけど。」

「ならいいじゃなく、ほらお祈りが始まるわよ。」

「あつ。」

実際に気持ちいいくらいのルイズっぷりを發揮し。

ベアトリスの異議を遮るルイズ。

そうして肩身の狭い思いをしながら食事を終えたベアトリスはルイズと別れて教室へと向かい。

席に着いて授業が始まるのを待つていると入室して来たのは。

「新入生の諸君。君らが最強と思つ系統魔法はなんだ！」

あ～やつと頭が覚めてきました。

みなさま、おはようございます。

はい、教室に入つて来られたのは風がサイコーのあの先生です。

わたくしはこの先生が嫌いなのですよ。

理由はキュルケさんを吹き飛ばしたあれですよ。

どんな意図があつたか知りませんけど。

女の子にあれはないと思こませんか？

「ミス・クルーデンホルフ。きみはどひ悪つかね？」

「うわあ、おひられちゃいました。

当たり障り無く風とで答へておきましょつかねえ。

まてよ。

キュルケさんのイベントは才人さんが召喚されてからだつたはず。

と、言つ事はまだ発生はしていないので。

「ここでの風の先生を叩いておけばキュルケさんが吹き飛ばされる事が無いかも。

うん、ここは後にルイズの良い友人となるキュルケさんの為に人肌脱ぎますか。

「はい、わたくしは最強の系統魔法は存在しないと思います。」

「なに?」

「論より証拠です、わたくしが魔法を撃ちますからミスター・ギターは風の障壁で防いでいただけますか?」

「よかわい、思いつ切りやりたまえ!」

「それでは行きます!」

杖を振るい作り出したは3メイル程度の水の球体。

そしてそれから勢いよく水が放出されて対象を吹き飛ばすオリジナ  
ル魔法。

「ウォーター・プレッシャー！」

その結果。

「う、まさか一人で教室の後片付けをするハメになるとは。」

ミスター・ギターを風の障壁」と吹っ飛ばしたまではよかつたんですけど。

つい、やり過ぎてしまい教室中水浸しになりました。

オールド・オスマンより教室の後片付けを命じられてしまいました。

「聞いたわよ、あのミスター・ギターを医務室送りにしたんですって  
ね。」

あ、ルイズが呆れる顔をしながら教室に入つてきました。

「それで元気だもん。」

あんなに元気だと教室中を覗渡して。

「あなた、まだでしょ?」

「へい、言こ返せないでです。」

「せり、貸しなさい。」

モップを取られてしまつました。

「手伝ひてくれるのですか?」

「ありがとうございます。」

「でも、一人でやつなさいって言われてますので気持つだけいただきます。」

「そんなのバーンきやいいのよ。」

ほり、やこの机を浮かせて。」

「で、でも。」

「バレたらバレたで一緒に罰を受ければいいだけの事よ。」

—  
ありがとう、ルイス。」

—  
—  
—

なんですかその『違うだろ』って、顔は?

あ、もしや。

「ありがとうございます、ルイズおねえさま。」

「くっくっく！ わあ、やつせと終わらせてクックベリー・パイを食べに行くわよ！」

「はい！」

昼食を食べに行く食堂までの道すがら。

そしてあつとこつ間に片付けは終わり。

「明日、春の召還の儀式を？」

「セウヨ、セウトわたしに相応しい使い魔を召喚して見せるわ。」

ついにルイズの手によつてこの世界に才人さんが召喚される日がやつてきましたか。

そして原作が始まりルイズは虚無の扱い手として望まぬ争いへと。

「ベアトリス、ベアトリス！」

「はつ  
ビテしました？」

「それはこいつのセリフよ、どうしたのよ急に難しい顔をして黙り  
じくへりちゅうて？」

「じめんなさい、ちよつと考え方をしてました。

えつと、召喚の儀式でしたね。

ルイズにはきっと素晴らしい使い魔を呼び出す事が出来ますよ。」

「自分で言つのもなんだけど、やけに自信ありげに言つわね？」

それはまあ、原作でルイズが才人さんを呼び出す事を知つてありますからね。

でも、そうなるとルイズは才人さんに。

ちよつと寂しくなりますね。

「ベアトリス♪。」

「はつ なんですか？」

「ねえ、あんたどうしたのよ？ なにか変よ？」

「 そんな事ありませんよ。

さあ、早く食堂に行きましょう。」

「あ、いら、手を引つ張らないでよ。」

そうして翌日。

自らの最愛の人となる相手をルイズはこのハルケギニアに召喚し。

ゼロの使い魔の世界が本当の意味でスタートをいたしました。

## 9話 何事も形からですよ。（前書き）

先日とんでもないのを目撃してしまいました。

右半分がガチャピンで左半分が熊のパーちゃんと言つ着ぐるみを着た人です。

縫い合わせが雑でしたので個人でされたのは間違いないでしょうが。

いつみたいなにをしたいのでしょう。

えーと、今回は召喚された才人を待ち受けていたいたのはベアトリス扮するの人です。

## 9話 何事も形からりですよ。

うへん、服は仕方ないとして髪型は よし、これでいいですね。

後は「」の眼鏡をつけて、目つきを厳しくして。

「コホン、コホン、あ～あ～、んつんんつ。

生意氣を盡つのはやの口かじりー、ちびルイズー!」

おお～かなり似て来たのではないでしょーか?

もう一回やつてみましょー。

「」のわたくしを誰だと思つてゐるのかじりー

わたくしは「・ガトリコール公爵家のコレオホールよー!」

はつ 。

み、みなさま い、いつから見ておつましたか?

まさか最初からではあつませんよね?

ま、まあ、別にやましい事をしている訳ではございませんので見られても構わないのですけど。

えっと、とりあえずなにをしていたかを『』説明いたします。

ルイズの為にも才人さんには早くこの世界に慣れていただきたくて。

数日前からわたくしが才人さんにしてこの世界の事を教えているのですよ。

でもってこの格好は。

人に物事を教えるのなら厳しく教えた方がその人の為かなーなんて思つた時に。

ふと頭に浮かんだのがエレオノールさんと言つ訳でして。

まあ、何事も形から入れですよ。

さて、今日もビシバシと厳しく扱いてあげようではありませんか。

「待つていな『い』よ、ちびルイズ。お~ほ~ほ~ほ~ほ~、です。」

そうしてベアトリスが向かつたルイズの部屋ではと『言つ』。

「きゅ、急に寒気が。」

しかし、おやかあの子があんな凝り性だとは思わなかつたわ。」

「なあ、あの女の子から授業を受けるのおれなのに。」

なんでお前、じゃなくてルイズさんはそんなに疲れてんだ?」

「ううせいわね。放つておいてよ。」

「んだよ、せつかく人が心配してやつてんの!」

「平民に心配される程わたしほ落ちぶれていな『い』わ。」

「へいへい、そりですかそりですか。そいつは失礼しましたね。」

「むつ、なによその態度は! ひつ、来た。」

ルイズが才人の態度に激昂しそうとしたその時に現れたのは。

「い、いこいこらつしゃい、ヒレ姉ちじやなくて、ベアトリス。」

「怒鳴り声が聞こえ気がしたのですが、なにがありましたか？」

「や、そそそそなはしたない真似をわたしがする訳ないじやないのー。」

眼鏡をくいっと上げながら尋ねるベアトリスに慌てるルイズ。

「氣のせいでしたかね？ サイ、才人さん。

予習と復習はしつかりとされましたか？」

「あ、ああ、一応はしたけど。」

「一応？」

「い、いや、ちゃんとしましたです、はい。」

「よのしこ。では」机のプリントをひとつ。」

ハルケギニア常識問題と手書きで書かれた紙を才人に渡す。

「今からこの100問を才人さんに解いていただきます。」

「え、マジでー。」

「ええ、わたくし達はベッドにでも座つておりますから才人さんはあちらのテーブルでどうぞ。」

そう言ってベアトリスはルイズが座つていたベッドへと歩いて行くと。

「才人さんにしっかりとハルケギニアに事を教えましたか、ルイズ？」

「え、ええ、ちゃんと教えたわよ。」

「そうですか。ではテストの結果が楽しみですね。」

「そ、そうね。」

苦手な姉と一緒にいるかのような錯覚を覚えて居心地がとても悪いルイズ。

そうして時間は経過し。

「はい、そこまで。」

「ああー疲れたー。」

才人の手からプリントを受け取り採点すると。

「 55点 。」

その結果にあるドレオノールが乗り移つたかのようにベアトリス  
は。

「 ルイズ 。」

「 な、なによ 。」

「 あなた、才人さんにしつかりとハルケギニアの事を教えたとわたくしに言いましたね？」

「 う、うん 。」

「 なら、なんですかこの結果は！」

「 そ、それはこいつが覚えが悪いから 。」

「 ちびルイズ！」

「 ひや、ひやい！」

「 わたくしの皿は」まかせませんよ。」

「え、あ、あの、その。」

「嘘をつくな！」の口ですか！」

「こひやい、いひやい、ゆ、ゆるひてお姉さまあー！」

トラウマからか頬を抓る相手が姉にしか見えなくなつてこるルイズ。

「いいですか、使い魔の恥は主であるあなたの恥でもあるのですよー。  
わたくしはあなたに恥をかけて欲しくないから！」ひじてるのがおわ  
かりですか！」

「は、はー！ わかります！ わかりますから放してーっ！」

「いいえ、あなたはわかつておりません！」

「『』めんなさーー！ 許してHレ姉さまーー！」

「違います。わたくしはベアトリスです！」

「あーん、もひじつちでもいいから許してーーー！」

そんな一人のやり取りを見て才人は。

エレオノールと言つ人物に対して恐怖心を抱いたのであつた。

そうしてルイズが嫌がるのでエレオノールの格好をやめて。

いつも通りの姿になつたベアトリスは。

「つ、やり過ぎてしまつたみたいでごめんなさい。」

「い、いいわよ、気にしていいから。」

「ああ、頬つぺたが赤くなつてしまつて 今治しますからね。」

「こ、これくらい大丈夫よ。」

「ダメです！ いいからじつとしていてください！」

と、言つて杖を取り出しルイズに治癒の魔法をかける。

「はい、これでもう大丈夫 ん？ お一人ともじつされましたか？」

「い、いや。」

「な、なんでもないわ。」

このギャップはなんなのだじつと考えてしまつ二人。

「ちつですか？ちつと『ぱぱ』の世界にはもつ慣れられましたか、才人さん？」

「あ、ああ、おかげ今までたいぶ慣れて来たよ。」

「ちつですか、それはよかつたです。」

「おれの為にいろいろとしてくれてありがとな。」

「いいえ、才人さんはルイーズの使い魔さんのですから。」

わたくしは当然の事をしたまでですのにお気になさらないでください。」

そつ、ベアトリスがいろいろと世話を焼いた事により。

才人は原作より遙かにマシな環境で暮らせていたのだ。

「あ、そうだ。また才人さんの世界の歌を教えていただけますか？」

「ああ、いいぜって言つても、だいたい教えてしまつたからなあ。」

「なんでもいいですよ。」

「なんでもつて言われても、流行りの歌以外はおれ余り知らないし。」

後は知つてゐると言つたらアーヴィングくらいしか残つてねえから困つたな。」

「それでもよいから教えてくださいませんか?」

「え、いいの?」

「はい。」

「えつと、んじゃあ。。」

才人が暮らしていた世界の日本が自分の暮らしていた日本と同じかはわからない。

しかしそれでもいいからベアトリスは聞きたいのだ。

そしてこの事が意外な副次的効果をもたらした。

どうみても詩人や文化人に見えない才人の口からポンポンと多種多様な歌が出て来る事により。

才人が異世界からやつて来たと言うのをルイズが信じたのだ。

こうして原作とは多少異なるこの世界の3人に翌日待ち受けていたのは。

例の香水事件であった。

10話 意味不なバラ。（前書き）

暗躍するベアトリス。

その時ルイズと才人は？です。

## 10話 意味不なバラ。

ギーシュの香水事件に関してベアトリスは。

ルイズと才人の心の距離を縮める為と才人自身が強くなる為にも必要な出来事だと思っており。

それから才人を回避せようとは思っていなかつた。

そのせいでと詫びでは無いが。

(「あんね、シエスタさん。

これも才人さんの為と思って堪えてくださいね。

もう少しで才人さんが現れるはずですから。 )

と、物陰からベアトリスが覗く先には。

両頬を腫らして偉ぶるギーシュと畏まるシエスタの姿が。

そう、香水事件が発生したのだ。

が、しかし。

(あ、あれ？ おかしいですね。そろそろ才人さんが現れてもよい頃なはずなのに？)

いつまで経つても才人の姿は現れず。

「も、申し訳ござりませんでした。

わたし、わたし、そんなつもりでは 。

「泣けば済むと嘗つ問題ではないのだよ平民のメイドくん。」

「は、はー。」

「きみは自分のしじみをした事をちゃんと理解しているのかい？」

「きみは自分の命を持つてしても償いきれない罪を犯したのだよ？」

(あ、あ、つ？ あのがきみちよ今なんて言いやがりましたか！)

命と血の言葉に敏感なベアトリスがギースコの一言にキレた。

「ミスター・グラモン！　自分の痴態を他者の責任にするとは、それでもトリスティン貴族ですか！」

その声に皆が振り返ると、ミスターは両手を腰に当てながら胸を張ったベアトリスの姿が。

慌てて身を正すギーシュと野次馬達。

「！」これはクルティンホルフ姫殿下ではありませぬか！

「いつ見ても愛らしいお姿を「そんな見え透い世辞などよい！」といえ、お世辞などでは。」

「ミスター・グラモン！」のメイドに頭を下げなさい！

「な、なにゆえ貴族のぼくが平民などに頭を下げなければならぬのですか！」

「貴族ですって？　己が行いが招いた結果を弱者にハツ当たりするあなたのどいか貴族だと言つのですか！」

「し、しかし。」

「なんですか？」言つてみなさい。」

「は、はい。平民は我ら貴族に従うのが当然ではありますか。」

「それで？」

「べ、別に貴族のぼくがこの平民を使い臺さを晴らしたとしてもなんら問題はないかと。」

その言葉を聞きベアトリスは心底呆れたと書ひふりて頭を左右に振り。

「　　よいでしょう。あなたのそのねじまがつた性根。

「このわたくしが叩き直してあげます。」

「は？　く、クルテンホルフ姫殿下、なこを叩いておられるのですか？」

「躾です。」

「は？」

「わがままな子供に躾をしてあげよつて言つのですー。」

さあー 杖を取りなさいー！」

その言葉に野次馬達からギーシュに對しての笑い声が上がる。

(なにが躾だ！ 小娘が生意氣な事をー。)

さすがにギーシュも頭に来たが相手は独立国の姫殿下。

（腹は立つが）万が一にでも怪我をさせてしまつてはマズイ事になつてしまつ。）

なんとか自制し。

「しょ、所用を思つて出つましたのでほんはこれで。」

と、その場から立ち去つとしたのだが。

「グラモンの家名まで地に落とすつもりですか？」

このベアトリスの言葉にギーシュは顔を歪め。

「　　」　　」のギーシュ・ド・グラモン。

謹んでクルデンホルフ姫殿下のお相手をやせていただきますー！」

そして場所はヴェストロの広場へと移り。

「嫌と言つても一方的に打ち付けられるのは嫌でしょう。

まあ、『隨意元ソース・グラモン』。

（ビームでぼくをばかにするのかね！

）「な、怪我をさせなによつてフルキューで驚かせてやるかー！」

バラを振り自慢のフルキューを作り出しあつとした時ギーシュの手が止まった。

（な、なんなんだね、この凄まじい魔力は？）

急速に頭が冷えて行くギーシュは思い出す。

ベアトリスが齡12歳にして4系統全ての魔法を使いこなした天才メイジと言つ事を。

そしてその事がこうして対峙してると眞実と言つ事が嫌と言つ程に理解出来た。

「来ないなら、から行きますよ。」

そう言つとベアトリスは杖を振るい。

「これはあなたがさつきメイドにした行為です！」

# ウインディア・アイシクル！」

無数の氷の矢が自分に降り注ぐように襲い掛かって来るのにギー  
シユは悲鳴をあげる。

しかし二つまで経つても身体を襲う痛みの無い事に疑問を感じ。じ。

恐る恐ると目を開けるとそこは数えるのが億劫になるくらいの無数の氷の矢が地面に突き刺さつており。

今さらながらにクルデンホルフの魔女と呼ばれるベアトリスの実力に背筋に冷たいものが走る。

そんなギーシュにベアトリスは諭すように話し掛けた。

「どうですか、圧倒的な力と言つものに晒された恐怖は？」

「ぐ、クルテンホルフ姫殿下。」

「もう一度問います。弱者に力を振るい恐怖を味あわせるのが貴族のする事ですか？」

「ぼくが間違つておりました。」

「そう、わかつていただけましたか。」

「はい、ありがとうございます、クルテンホルフ姫殿下。

不肖、このギーシュ・ド・グラモン。

女性の愛で方を間違つておりました。」

「へ？」

予想外の返答にベアトリスから間の抜けた声が出る。

「これからは一人の女性に対してのみ口の愛を囁く所存。」

「は？」

「ぼくの間違つた愛の犠牲になつた美しき花達にはこれより許しを乞つてまいります。」

「あ、いや、あの、わたくしが言いたいのは、は。。。」

「ああ。『心配には及びません。

先程のメイドにもしつかりと許しを乞つ所存でござります。

「あ、それがいいと思こますけど、わたくしが言へるのは、

「おお、こうしてはござられない。

生まれ変わったぼくの處で早く傷ついた花達を慰めねば。

「いや、あの。

「では、クルテンホルフ姫殿下。ぼくはこれにて失礼を。

「なんなのよ。」

余りに奇怪なギーシュの思考にベアトリスが呆気に取られていると。

「うわあ、なんだよこの氷の檜みたいなのは？」

「ふ、二人ともこつたいたいどこに？」

と、騒ぎを聞き付けてやつて来たのはルイズとオ人。

「『J』にひいて、自分の部屋でサイトに勉強を教えてたのよ。」

(サイト?)

「ああ、ルイズのおかげでいつ抜き打ちテストされてもいいようにバツチリと覚えたぜ！」

(ルイズ?)

「あんたね、あんまり調子のいい事言つてわたしに恥をかかせないでよ？」

「へいへい。頑張らせていただきますです、『J』主人さま。」

「調子がいいわねえ。まあ、いいわ。

で、なにがあつたのよベアトリス?」

この一人、なぜこんなにも急に仲が良くなつたのかと、

エレオノールの格好をした時のベアトリスに恐怖を感じた二人はそれこそ必死になり勉強を教え学び。

その結果、いわゆる戦友のような感情が芽生えたのだ。

しかしそんな事を知らないベアトリスは。

（え？ なに？ いつたいなにがこの一人に？

て言つた結局わたくしはいつたいなにを？）

そつして混乱するベアトリスにこの後待受けっていたのは。

ボロボロになつた芝生を一人で直しなさいと言つオールド・オスマンからの処分であった。

「うう なんでこんな事になつてしまつたのでしょうか くすくす  
ん。」

一人寂しく芝生を直すベアトリスを見る4つ目。

「お、みんないなくなつたみたいだぜ。」

「準備はいいわね、行くわよ。」

友が困つた時にこそ手を差し延べるのが親友と言つのならば。

それはきっと今のルイズ達の事を書いたのだろう。

11話 青い少女。（前書き）

本と言えばあの人ですね。

## 1-1話 青い少女

「おお～ さすがはトリステインが誇る魔法学院なだけはありますね。

」

あら、みなぞここにいた。

本日は学院の図書館に来ているのですけど。

見てくださいこの書物の量を！

ざつと見も数千、いや、数万本くらいの書物はありますね。

これなら一年間くらいは暇が潰せそうですね。

ん？ なんですか？ 別におかしな事を言った あつ！

そうでしたそうでした。

実はわたくし本を読むのが異常なくらい早いのです。

「どうやらこれも悪戯神様が『えてくれた魔法の才能の一部みたいで。

おかげで時間をかけずに本を読み理解する事が出来るのです。

さて、ではあの棚の端から順に読んで行きましょうかね。

え～と、どれどれ中身は『モンマジックの。

はい、却下。

前に読んだ本と内容が被りまくりです。

次行つてみましょか次。

そんな事をわたくしがやつていると。

「邪魔。」

「はい？」

きょりきょり周囲を見渡すが人の姿は無し。

「おかしいですね。確かに人の声が聞こえたはずなのに？」

気のせいかと思い棚から別な本を取り出そうとする。

「邪魔。」

またもや人の声が。

しかし辺りを見渡しても人の姿は一切なし。

「も、もしや、魔法学院の七不思議のひとつとかに遭遇しているとか。」

そんな事を考えていると。

「上。」

「つえ？」

その声につられて上を見上げるとそこには。

た、  
大変です！

まだ夕方だと書いたのに、ゆ、ゆゆゆ幽霊を見てしましたー！

しかもその幽靈さん、すーっとわたくしの皿の前に下りて来たではないですか！

「幽靈」。

なんかこの幽靈さん、血口主張しながらひざで手を伸ばしてくるのですけど！

「幽靈。」

あわわわわ  
。

ゞ、ゞひこしょひ。

そ、そ、うだー、えーと、えーと、幽靈さんを退治する魔法は  
。

(あ、知らなー ゃ。)

観念して目をキュッと閉じていると。

「幽靈 怖い。」

なんと幽靈さんが自分の事を怖いと書いて、わたくしに抱き着いて  
ん?

(この頬に触れるさわさわした感触は人の髪の毛?)

そう思い、目を開けると視界に飛び込んで来たのは。

「青い髪の毛?」

まるで真つ青な青空のよつた美しい青い髪の毛でした。

( もしゃーの幽靈さんの正体はシヤ、あ、いや、タバサさん? )

幽靈さんの顔を覗き込むと。

( あ、やつぱり。 )

わたくしが幽靈と思ったのは、シャルロット・ヒーネス・オルレアンことタバサさんでした。

でも人気の無い図書室の床に生氣を感じさせない人が浮いていたら。

誰だつて勘違いすると思ひませんか?

あ、それよりもまづは。

「あ、あの ミス・タバサ。

なんと言こますかわたくしの勘違いだったみたいでして。」

「 勘違い? 」

あ、タバサさんの震えがピタリと止まりました。

「はい、申し訳ございませんでした。」

「…………」

わたくしを睨みながら離れるタバサさんが怖いです。

「あの 本をお探しの所を邪魔をして申し訳ございませんでした。

わたくしは「れにて失礼をせかしていただきます。」

「…………」

「あの？」

「あなた。」

「はい？」

「クルテンホルフの魔女。」

「ま、まあ、そつとも呼ばれておりますね。」

「12歳でスクウェアクラスになつた天才メイジ。」

正確にせりふと違いますけど。

「恥ずかしながらそいつとも呼ばれる事もありますね。」

「お父さま。」

「は？」

「あの、ミス・タバサ。」

うへん。どうしたと聞いつでしゃう。

わたくしの顔を見たまま動かなくなっちゃいました。

なにか話題を振つてみましょうかね。

「ところで、やつときはなんの本を探されてたのですか？」

「ヒーリング。」

「お、反応が返つて来ました。」

「ヒーリング？ 確かミス・タバサは水と風の系統を使えると聞いた事が。。」

「応用。」

「ああ、なるほど。」

授業で習つ以上の治癒の魔法の使い方を知りたくて調べていたと言う訳ですか。

「あなた、知らない？」

「わたくしですか？ わたくしはじめて使うのが今日初めてですわよっと。」

「そう。」

ん？ 少し疲れた様子ですね。

「どれくらい探されてたのですか？」

「2時間。」

「そ、それはまた。」

しかし、それだけ探して見当たらないと言つ事は。

誰か持つて帰つてしまつたのでしょうかね？」

「殺す。」

い、いきなり物騒な事を言つ人ですね。

ま、まあ、本来この本は持ち出し禁止ですのでルール違反者には罰を下さるべきですけど。

なにも命まで取る事はないじゃないですかタバサさん。

「し、しかし、もし本当にそなへん困つた人もいたもんですね。」

「困った。」

「ついぶんと深刻な表情をされますね。」

「あ、そうだ！」

「先程の謝罪にわたくしが教えたしましょう。」

「ミス・タバサ。ヒーリングの応用の本なら何冊か読んだ事が『J』を  
いますので。」

「それをお教えたしましょうか？」

「あなたが？」

「ええ。ミス・タバサがよろしければですけど。」

「。。」

タバサさん思案中～。

「お願いする。」

「かしこまりました。ではここで立ち話もなんですね。」

「あちらの席に座りましょ！」

と、その場から移動しようとすると。

「もっとここ場所がある。」

「は？」

「ついて来て。」

「あ、ミス・タバサー！」

すたすたと出口の方に歩いて行ってしまった。

もっといい場所つてどこのなのでしょうか？

「。。」

おっと、タバサさんが出口の所からこちらを見ています。

早くついて来いって事ですね。

そしてわたくしが連れられて行った先はと申します。

「タバサさんの 部屋？」

「入つて。」

「お、お邪魔いたします。」

促されて中に入るとなかに思つた事は。

シンプル・ザ・ベスト。

年頃の女の子の部屋には全然見えないですねえ。

が、しかしわたくしの田はいまかせさんよー。

あの棚に並んだ、そり、右端から5番田の本ー

あれはわたくしも愛読しているイーヴァルディの勇者ではありますか！

ふふふ、タバサさんとの距離が一気に近付いた気がしてなりません。

そんな事を思つてゐると、タバサをここに用意したのか。

ワインの注がれたグラスをわたくしに渡すとベッドの端に座つ。

「座つて。」

ヒ、ぽんぽんと自分の横を手で叩く。

これは、全て語るまで歸せなこだ、ヒヤヒヤ遠回しな意思表示なんで  
じゅうか？

「 。 」

「あ、はい。今座つますです。」

無のフレッシュヤーつて苦手です。

「えーと。では、『れよつベアトリスの水の系統魔法の講義を始め  
ます。』

「ん。」

そつして話しさは始まり。

時折タバサさんから質問が入る内に。

「よい点に着目されましたね、ミス・タバサ。」

「ん。」

段々と話しへ熱が入つて行き。

「む？ 暗くなつて来ましたね、ライト！」

何時しか時刻は夕刻へとなり夜となり深夜へとなり。

「くしゅん、くしゅん 寒う。」

何故、わたくしはベッドの上になんて眠つているのでしょうか。

それになんか頭がガンガンとして胸の辺りがムカムカとします。

もしやわたくしさはお酒を飲んだのでしょうか？

おかしいですね。

アルコールに弱いのでめつたな事ではお酒を口にしないのですが。

「ふわあ ふわあ くしゅん！ くしゅん！」

「冷たい。」

「は？」

い、今 確かに人の声が聞こえて。

だ、誰か部屋の中にはいるのでしょうか？

「 なにも見えませんね。」

月明かりが差し込む窓辺以外は室内が真っ暗で、これではなにもわ  
かりません。

え~と、杖はどうに。

「いたたたたつー。」

身を起してみるとしたら誰かに髪の毛を引っ張られてしまいました。

誰ですか人のしつぽを掘んでいるのは?

あ、それより杖は杖はと あ、あつた!

「ライライー。」

魔法の光りに照らし出されたのは。

わたくしの上方のしつぽを掘むどこるか。

マフラー代わりに首に巻き付けているタバサさんの姿。

「 なに、この状況は あつー。」

そうでしたそうでした思い出しました。

わたくしはタバサさんの部屋でタバサさん相手に魔法の講義をしていました。

と、すると「この頭痛と胸のムカムカ感は。

む〜。記憶ありませんけど、どうやら喉が渇いてワインに手を出してしまったみたいですね。

さて、気分も悪い事ですから自分の部屋に帰つて休むとしますか。

「ミス・タバサ。

起き上がりないので髪の毛を放してくれませんか?」

「。。。

「わたくしのしっぽはマフラーではありませんよ〜。」

「。。。

「タバサさん、起きて〜。」

「。。。

困つきましたね、起きる気配ゼロです。

「「「くしゃんー。」」

くしゃみでハモリしました。

「お母さまタバサさんの方も無理矢理にでも起こすしかありませんか。

「タバ」「お母さま。」「え?」

お母さま。

「お母さまの髪の毛 いこいがかる。」

やつぱはわたくしの使つてこぬくアコンティッシュナーはガ  
リア産の。

もしや、タバサさんのお母さまわたくしと回りのを使われている  
のでしょうか?

あ そ う で し た。

タバサさんのお母さまはジニアセツさんにエルフの薬を飲まれて心を。

しつかし、あの青いおつそんろくな事しませんね。

もし、ルイズに同じ事をしゃがりましたひ。

大国ガリアの王さまだらうが関係ありません。

タンスの角に小指を思いつきりぶつける×100回の刑を味わわせた後に。

自分から殺してくれつて口にするくらこの酷い目に遭わせて殺つてあげます。

「 お母さま 」

このまま寝かせてあげたいですね。

でも、このままでは一人とも風邪を 。

あ、そうだ。

「ふ～～～しょひど。」

タバサさんをもひづなつとひらひらぬせにマントを重ねて、キコッとする  
れば。

「温かい。」

これならお互いに風邪をひかなくて済みそうですね。

さて、わたくしの中の睡魔さんがお仕事を始めたようだす。

「せめて今だけは良い夢を見てくださいね。タバサさん。」

「ん。」

あれ？ 今、返事が まあ、いいです。

おやすみなさい、タバサさん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1826x/>

---

ふたつのしっぽは長くキラキラと。

2011年11月1日06時16分発行